

月刊

GPP



Vol.64

令和3年2月号

株式会社
グロースパートナーズ

いま出来ることからやっぺいこう

観測史上、最速で春一番が吹いた。ヒマラヤでは氷河崩壊による鉄砲水で多くの犠牲者が出たのはニュースになったが、その後はどうなったのやら。。

「2050年にカーボンニュートラル社会を目指そう」と昨年未だに政府が声高々に宣言したが、きつとそこに携わった人の殆どは2050年にはいない。福島県において「除染土の最終処分場は30年後に県外に設置する」と言っているのと似ている気がしている。いま出来ることからやれば良いのに、それぞれ数字に理由はあるにせよ、適度に遠過ぎず、近過ぎずのところにゴール設定するのが昨今のやり方に思えて仕方ない。

我々がセルドロンは建設業界に身を置いているが、この建設業界ほどスローな業界は無いのではないかと思えてくる。良く言えば慎重、悪く言えば腰が重い、石橋を叩いて渡らない。また、プライドがやけに高い。同業他社が開発した資材や工法は、B社は絶対に使わない。バイクや車の世界では、平気で同業他社の部品を使い合う。品質が良くて、コストがあつていれば、躊躇なく起用する。そう、良いものは良いのだ。

建設業界における技術系の人材不足は深刻だ。年間の需要は50兆円を当面維持するとの見方が強く、ここにインフラメンテの必要性がプラスされる。”I-Construction”や“建設DX”といった単語が躍っている昨今の建設業界だが、実情はまだまだ程遠い。とある人に言わせれば、「ミリ単位の技術が確立されていない」「何年も前から取り組んでいるがいまだ出来ていない」と言うのが普及しない理由だそうだが、日進月歩が技術の世界の常識。出来ない理由は他にありそうだ。設計会社があつて、元請けがあつて、下請けがあつて、孫請けがあつて、ひ孫請けがあつて・・・、昔ながらの産業構造に問題は無いものか？そもそも施工会社が人材とエネルギーを費やして素材開発していることは、正しいことなのか？

世界はカーボンニュートラルな社会の実現に向けて大きく舵をきった。出来るかどうかではなく、やらなくてはいけないのだ。「A社の技術だから使わない」なんて、ちっぽけなプライドは捨てないといけない。良くて、直ぐ使えるものは使うのだ。I-Constructionや建設DXはゴールではなく、CO2削減というゴールに向けて単なるツールになったのだ。

今日出来ることから、いま出来ることからやっぺいこう。

藤井 成厚

セルドロンをスラッジ水やカッター排水に混ぜるとどうなる??

■スラッジ水との試験練り

先送りモルタルでセルドロン処理をしていることは増えてきておりますが、生コンクリートプラントなどで発生するスラッジ水にセルドロンを混合しました。生コンクリートプラントでは、アジテータ車の洗い水などで発生してしまうスラッジ水の処理は厄介なものようです。処理方法は様々ですが、洗い水を沈殿槽にためてセメント成分を沈殿させ濃くなったところを産業廃棄物として処分しているようですが、流動性が高いため扱いにくく費用も高額になるそうです。セルドロンを使うことで流動性を低下させて、砂状にすることができました。ここまでするとセルドロンの添加量が多くなってしまいうため、ある程度流動性が低下した状態で処分するほうが費用は抑えられそうです。



■カッター排水の試験練り

道路工事でよく見るカッター排水に、セルドロンを混合してみました。カッター排水は、産業廃棄物になるためマニフェスト作成して処分しなければいけません。少量のためそのまま垂れ流している会社もあるようです。当然、環境にも悪影響です。しかし、カッター排水を処分するには手間とコストがかかります。液体のため処分にも箱型の容器で漏れないようにしなければなりません。セルドロンを入れて流動性を低下することで処理がしやすくなるかと考えております。



本社移転のお知らせ

2020年12月1日に
下記住所へ移転しました。

新住所
〒107-0052
東京都港区赤坂6-10-42
パシフィックパレス赤坂401
TEL: 03-4405-2642
FAX: 03-6369-3805

※電話番号やFAX番号に変更はありません。